

【事例】「育てる広場」を制度化した複合公共施設運営モデル ～大阪府茨木市おにクル～【要旨】

大阪府茨木市では、文化、子育て、交流機能を一体化した複合施設「おにクル」を整備した。本事例の特徴は、施設整備にとどまらず、開館前に管理運営計画を策定し、「育てる広場」という理念を組織体制と会議構造にまで落とし込んだ点にある。多主体が同居する中で、横断的な運営体制を構築し、市民とともに使い方を育てる公共施設モデルを実装している。

背景・目的

- ・ 築45年を経過した旧市民会館の老朽化・閉館を契機に、その跡地エリアの活用検討の結果整備したもの。
- ・ 市民との対話において、市民が市民会館跡地エリアに「ホール」「憩い」「交流」「賑わい」を求めていることを把握。
- ・ 市民の想いと市の政策課題等を踏まえ、文化ホール、図書館、子育て、市民活動等の機能を集約化。
- ・ 単なる建替えではなく、複数機能を集約し、市民とともに使い方を育てる「共創型公共空間」の創出を目指した。

施設の概要

- ・ 伊東豊雄氏（プリツカー賞受賞者）設計
- ・ 竹中工務店・伊東豊雄建築設計事務所共同企業体



- 7階 市民活動センター、コワーキングスペース、プラネタリウム、和室、会議室
- 6階 図書館
- 5階 図書館、大ホール2階席
- 4階 大ホール1階席、ホワイエ
- 3階 大ホール、リハーサル室、多目的室(音楽・ダンス)
- 2階 こども支援センター
- 1階 多目的ホール、屋内こども広場、カフェ、調理実習室等

スケジュール

- H27年度（2015年）～R2年度（2020年）
 - ・ H27年に市民会館が開館し、H28年の市民アンケート・100人会議、H29年の跡地活動検討教育委員会設置を経て、H30年に「育てる広場」を理念とする基本構想が策定され、R2年には社会実験「IBALABPLUS」を実施するとともに、3月に新施設と広場の設計施工事業者が確定し、7月にはIBALAB@広場として設計ワークショップが開催された。
- R3年度（2021年）～R6年度（2024年）
 - ・ R3年には、IBALAB@広場において、プログラム実施者による情報交換や活用方法の検討が行われ、R4年4月には新施設名称「おにクル」が決定し、同年5月以降、開館プレ事業や庁内勉強会等を通じて開館に向けた準備が進められた。R5年にはオープニングイベントおよびこけら落とし公演が実施され、R6年には大ホールこけら落とし公演が行われた。

結果・効果

- 活動量・交流創出
 - 1階オープンスペースでは年間768件のイベントが開催されるなど、多様な主体による継続的な活動が展開されている。単なる施設利用にとどまらず、日常的な交流と共創の場として機能している。
- 社会的評価
 - みんなの建築大賞2025において大賞および推薦委員会ベスト1を受賞。
- 都市回遊性への影響
 - 年間200万人が来館し、日々多彩な活動が展開されているおにクル。

【事例】「育てる広場」を制度化した複合公共施設運営モデル ～大阪府茨木市おにクル～【要旨】

おにクルには、7階建ての各フロアに市直営部門、指定管理者、図書館、子育て支援部門、民間テナント等、計8つの主体が同居している。こうした多主体による複合施設において縦割り運営を防ぐため、開館前に策定した「管理運営計画」に基づき、「おにクル会議」と総称される横断的な運営体制を構築している。責任者による意思決定の場、全館的な情報共有の場、分野別ユニットによる検討の場を段階的に設けることで、理念や方針を日常の運営に落とし込んでいる。各組織が参加する、各ユニットでは、若手スタッフを中心に月1～2回程度の定例会議を実施し、分野を越えた課題共有や企画検討を行っている点が特徴である。

指定管理

- 全体管理(管理運営、ホール、プラネタリウム、広場、維持管理)
おにクルみらい《SPS(株)、イオンデイライト(株)》
- 屋内こども広場 まちなかの森 もっくる
まちもりAJグループ《明日香(株)、(株)ジャクエツ》
- 市民活動センター きゃぱす
いばらき市民活動推進ネット《NPO法人5者》

市運営

- 全体調整・連携・総括
共創推進課
- おにクルぶっくぱーく
中央図書館
- こども支援センター
子育て支援課

その他

- 一時保育室(委託)
(株)明日香
- カフェ(目的外利用)
(株)オンザテーブル

おにクル会議

